

大和物語

姨捨

① 信濃の国に更級といふ所に、男住みけり。  
が すんでいた

② 若きときに親死にければ、をばなむ親のごとくに、  
若い 死に だの 姨に が ように

若くよりあひ添ひてあるに、  
若い時 付き添って世話をした いた が

③ この妻の心、憂きこと多くて、この姑の老いかがまりてゐたるを  
は 憎らしい が 老いて腰が曲がつ ていた 姿

常ににくみつつ、  
憎くみながら

④ 男にも、このをばの御心の、さがなくあしきことを  
姨に 意地悪く ひどい

言ひ聞かせければ、  
言い聞か せられ ば、

⑤ 昔のごとくにもあらず、おろかなること多く、  
男は 以前 ようで なく いいかげんに 扱う が

このをばのためになりゆきけり。  
姨 身に 対し て なつていつ た

⑥ このをば、いといたう老いて、二重にてゐたり。  
姨 とても ひどく 腰が 折れ曲がつ て いた

⑦ これをなほ、この嫁、所狭がりて、今まで死なぬことと思ひて、  
このこと いっそう 男の が 窮屈でやかいがつ ず にいるとは 思つ

よからぬことを言ひつつ、⑧「持ていまして、  
男に姨の よく ない (告げろ) 言つ ては 連れて いらつしやつ 「持ちて」 サ変「いゝ坐す」

深き山に捨て給ひてよ。」とのみ責めければ、  
深い なさつ ばかり た ので 確述

⑨ 責められわびて、さしてむと思ひなりぬ。  
男は いやになつ そのように しま おう 思うようになつ た 強意

⑩ 月のいと明かき夜、「嫗ども、いざ給へ。  
明るい ばあさんよ さあ いらつしやい

寺に尊き

法会を催している

わざすなる、

「来」の代わり  
それを  
申し上げよう。  
見せ奉らむ。」

⑪と言ひけれ

言つたば、  
姨は  
このほか

喜んで男に  
喜びて男に  
背負わ  
てしまつた  
にけり。

⑫高き山の麓に住み

高い  
住んでい  
ければ、

奥深く  
その山にはるばると入りて、

高き山の峰の、下り来

高い  
下りてこれ  
来べくも

所  
あらぬに置いて逃げて来ぬ。

⑬「やや。」と言へ

姨は  
これ、これ  
言つたが

男は  
返事  
しないで

帰つて  
逃げて、家に来て思ひを  
考え続けていると、

⑭言ひ腹立てける

妻が告げ口を  
して  
腹を立てさせた

時  
折は、腹立ちて、

このように  
かくしつれど、

⑮年ごろ親の

長年  
ように  
養ひつ

つ  
あひ添ひにければ、

いと悲しくおぼえけり。

⑯この山の上より、月もいと

頂上  
たいそう  
この上なく

明るく照つ

出で  
出でたるを眺めて、

⑰夜一夜寝も寝られず、悲しう

一晚中  
悲しく

思われ  
おぼえければ、

かくよみたりける。

⑱わが心慰め

は  
慰めることはできない  
かね

つ  
更級や姨捨山に照る月を見て

⑲とよみてなむ、また行きて迎へ

詠んで  
捨てた所へ  
行つ

迎へ  
連れて

持て来にける。

⑳それよりのちなむ、姨捨山といひ

から後  
言つ

たそうだ  
ける。

・ 姨捨山を引き合いに出して、歌などに縁語として詠まれるの

よしに  
由来で  
なむありける。

断定